

## 『武漢歌人』・『武漢文学会雑誌 武漢文化』解題および細目

\*木田隆文

## 要旨

漢口（武漢）日本租界に関する研究は、これまで政治史や建築・都市研究の分野で一定の成果が挙げられてきたものの、居留民社会、特にその文化面の研究は資料不足も相俟ってほとんど進展がなかった。

しかし先ごろ稿者は、漢口で発行された文学雑誌『武漢歌人』および『武漢文学会雑誌 武漢文化』の二誌を入手した。両誌は現地居留民が結成した文学者団体、武漢歌話会・武漢文学会の会誌であったが、やがて汪兆銘政権が設立した翼賛文化団体である中日文化協会武漢分会の機関誌へと位置づけを変えた。そのためこの両誌からは、現地居留民社会の文芸文化の動向だけでなく、汪兆銘政権統治地域における文化支配の実態をうかがい知ることができるともできる。

本稿はその両誌の改題および記事細目を紹介することで、武漢居留民社会の文化動向および文化支配の実態を解明する基礎資料を提示することを試みたものである。

キーワード・漢口租界 武漢文学会 武漢歌話会 中日文化協会武漢分会 文化統治

## 一 はじめに

日本の海外進出史において、武漢の持つ意味は決して小さくない。長江流域の水上交通の要衝にあたる武漢は、大陸進出を狙う近代日本にとって地政学上きわめて重要な意味を持つ都市であった。その重要性を認識した明治政府は、一八九八年に漢口に租界を設置、一九〇七年には日本領事館を総領事館に昇格するなど、天津・上海と並ぶ大陸経営の拠点とした。またさらに日中戦争以後は、中支戦線の最前線に位置する都市として軍事面での重要性が増し、多数の駐留兵士と最大一万人以上の居留民がその地に暮らしていた。<sup>(1)</sup>

だが一定の歴史と規模を維持した租界でありながら、漢口の租界研究は意外なまでに進展していない。二〇〇二年に野沢豊が『近きに在りて―近現代中国をめぐる討論の広場』（二〇〇二・六）誌上に「武漢近現代史研究会の呼びかけ」を発表、その後同誌は

四三号(二〇〇三・八)、四六号(二〇〇四・一二)で特集を組み、武漢近現代史研究の意義と重要性を指摘した。また旧日本租界について精力的に報告を重ねている孫安石・大里浩秋らも『神奈川大学人文学研究叢書22』中国における日本租界―重慶・漢口・杭州・上海』(お茶の水書房 二〇〇六・三)をはじめ、いくつかの研究で漢口租界への検討を行っている。<sup>②</sup>

これらはいずれも、租界成立史や都市研究の分野で多くの成果をあげてきた。ただその一方で、研究対象がおおよそ一九二〇年代までの事象に絞られており、日本による武漢統治が本格化する日中戦争以降の動向にはあまり関心が払われていない。またその関心領域も、政治経済史や建築、都市研究の分野に集中しており、居留民の生活実態やその文化面に対する検討はほとんどなされなかった。そしてなにより、これら以後、漢口租界の研究は停滞したままとなっている。

いうまでもなく、その原因は資料不足にある。漢口租界では『漢口日日新聞』はじめ複数の新聞・雑誌類が刊行されていた。その最大のものは一九三九年に創刊された邦字新聞『武漢大陸新報』であるが、それすら残存状況は極めて悪い。<sup>③</sup>しかし先ごろ稿者は、現地で刊行された文学雑誌『武漢歌人』・『武漢文学会雑誌 武漢文化』二誌のまとまった数入手した。<sup>④</sup>後述するが、これら二誌は漢口居留民によって結成された文学団体が発行した文芸誌で、のちに現地の文化統治政策を担った中日文化協会武漢分会の機関誌となったものである。そしてそこには居留民による創作のみならず、現地文化政策に関する評論、

老漢口らによる邦人社会の回想など、漢口居留民の文芸文化活動の実態や文化統治政策を概観しうる多彩な情報が掲載されている。

そこで本稿は、武漢近現代史研究の再始動の契機として、当該資料の解題および細目を提示しておくこととする。それは武漢の文芸文化の実態究明はもちろん、上海を軸とした汪兆銘政権支配下の文化統治政策の解明にも寄与することを期待してのことである。

なお本稿は紙幅の関係で、解題および細目の紹介のみに限定した。両誌の分析から浮かび上がる日本統治下武漢の文化状況については別稿を予定している。<sup>⑤</sup>

## 二 『武漢歌人』

### 二・一 書誌事項および解題

〔刊行状況〕 一九四一年二月二五日(第一巻第一号)～一九四三年九月五日(第二巻八・九合併号)／全一六冊／月刊

※第一巻第九号から第二巻第一号まで三か月休止あり。第一巻第一〇号は休刊。

〔編輯兼発行人〕 松浦久満太郎(第一巻第一号～第九号) ↓瀧本肇(第二巻第一号～第六・七合併号) ↓谷貞次(第二巻第八・九号)

〔印刷所〕 開進社木村印刷所(漢口江漢路三七三号) ↓武漢報附設第一印刷所(漢口市江漢路二一八号) ※第二巻第六・七号より変更

〔発行所〕 武漢歌話会(漢口特一区漢景街二八九号松浦方) ↓漢口日本租界中



【図1】『武漢歌人』（創刊号 1941・12）表紙。表紙上部に「現地編輯」とあり、表紙画にもそれにふさわしい現地風物（柘榴）が描かれている。

街二三號）※いずれも松浦久満太郎自宅 ↓中日文化協会武漢分会附

設武漢歌話会（漢口日本租界忠成街一號）※第二卷第一号から変更

〔体裁〕A5判 〔頒価〕二〇～二五銭・儲備券二元

〔売捌店〕思明堂書店・長江堂書店・漢口堂書店・龍文堂書店

〔所蔵状況〕稿者蔵・第一卷第一号～第二卷第四号、第二卷第六・

七号～第八・九号（一五冊）／関西学院大学図書館・第一卷第一

～二、四～五、七、九号（六冊）

\*

『武漢歌人』は武漢歌話会によって刊行された歌誌である。本誌の編輯者であった松浦久満太郎の回想によれば、同会は松浦が現地の文学者団体・大江文藝会の会員に呼び掛けた私的な歌会を母体とし、一九四一年七月二七日に発足した現地居留民による短歌結社である。

同誌は全一六冊が出版されたと思われるが、創刊号から第九号までの編輯発行は松浦久満太郎が担当。発行所は名義こそ武漢歌話会だが、所在地は松浦の自宅であり、本誌の前半期は松浦を軸とした運営体制が敷かれていたことがわかる。その誌面の特色としては、会員の詠草やその批評とともに、随筆類が多く掲載されていることがあげられる。そのうち松浦「揚子江の畔にて」（創刊号・第九号）は、歌話会の活動や現地の生活文化事情を伝える内容である。また「漢口日本人の詩歌史」（第二号）は、明治期から現地で暮らす「老漢口」の代表的人物である内田佐和吉の執筆にかかるもので、現地の文芸文化状況だけでなく、漢口居留民社会の生きた証言となっている。さらに会の彙報として毎号のように掲載された「武漢歌話会の歩み」は、会の動向に加え、草野心平や棟田博などの来漢作家の足跡が記されており、武漢の文芸・文化状況はもちろん、作家の移動と交流の記録となっている。

またもう一つの特徴としては、「戎衣集」と題する前線兵士の詠草が毎号掲載されており、一種の慰問雑誌の役割を果たしていたことである。これは雑誌の創刊にあたり、現地の文化工作を担った中日文化協会武漢分会が資金援助を受けたこと、またそれにかかわってであろうか、初期の運営メンバーに軍部から寺中作雄が加わったことが関与

していると思われる。

ただこれら兵士に対する配慮は、初期の段階においては副次的なものでしかなく、その中心はあくまで居留民の創作活動に置かれていた。しかし一九四二年四月に歌話会が中日文化協会武漢分会の傘下に加えられ、同八月の第八号より発行所名義が「中日文化協会武漢分会附設武漢歌話会」に変更されたのを契機に、徐々に「戎衣集」の比率が増し、歌話会の活動も、慰問短歌会の実施など兵士への慰問奉仕へとシフトしてゆく。さらに一九四三年一月には、創刊時から編輯を担った松浦が「更迭」され、編輯発行人が瀧本肇に変更されると、その翼賛への挺身は一層闡明になる。瀧本はその所信表明にあたる「對影居雜記」(第一〇号)で、「本会推進の私の意志は(中略)大君の赤子としての本分達成に邁進すること」と明言し、それを実現するかのようになり、誌面から現地詠は姿を消し、戦争報道を題材とした作品が目立つようになる。また歌論においても「萬葉集」への関心や「ますらをぶり」の推奨など、現地雑誌としての特色は消去されてゆく。そしてその特色が最も顕著に表れたのが表紙画であった。第九号までの表紙は、毎号武漢の風物が題材に取られており、現地編輯の雑誌にふさわしい雰囲気なたたえている【図1】。しかし瀧本が編輯した第二巻第一号の表紙から兵士の埴輪が描かれており【図2】、しかも同じ図柄が連続で採用されるなど、戦争および日本回帰への強い関心を示している。だがこうした過剰な翼賛への挺身は、結果として歌話会の解体と雑誌の廃刊を招くことにつながったかもしれない。体制変更が発表され



【図2】『武漢歌人』(第2巻第1号 1943・1)表紙。「現地編輯」の表示が消え、挿絵も兵士の埴輪となる。翼賛化および日本回帰の傾向がみられる。

た翌号の世古正文「編輯後記」(第二号)には「同人作品は、どうしたものか、原稿の集りが極めて悪かった」という文言がみられるが、ここからは翼賛化した歌話会から離反する居留民歌人たちの姿が見える。しかもそれに追い打ちをかけるように、歌話会を接収したはずの中日文化協会武漢分会が、資金不足を理由に補助金を停止する。第一六号掲載の谷貞次「編輯後記」には、資金停止の経緯とともに「今後の刊行は未定」とあり、『武漢歌人』は同号を最後に廃刊したと思われる。

『武漢歌人』には、居留民が自ら作り上げた文学場が、文化統治政策によって横領、壊滅させられる様子がつぶさに記録されている。そ

れまた、本誌が外地における文化統治政策の実態を知る重要な資料であることも示していよう。

## 二・二 細目

\* 作品ごとに「作品名 執筆者名 ページ数」の順で示した。

\* 短歌作品についてはコーナータイトルごとにまとめた。また各作品は「詠題筆者名」の順で併記し、斜線で区切って示した。

\* 「戦陣集」「戎衣集」など、兵士による作品は詠題がない場合が多いため、執筆者名のみナカグロで区分して示した。

\* 彙報などについては、同じ頁に掲載されたものは一行でまとめ、斜線で区分した。

\* 注記については、随時「※」で示した。

### 第一巻第二号(第二号) 一九四二年二月二〇日印刷/同二五日発行

〔表紙〕清水福壽

〔扉〕扉の文 松浦久満太郎

作品 1・7

大陸春秋抄 松浦久満太郎/晩玉香 岡山昭雄/初秋 松尾金蔵

／邂逅抄 畝中かつ子/蟹 吉村浮葉/雑唱 水野恵三良/雑詠

木ノ内二郎/郷愁 上田忠次/帰国 木村満次/海ゆかば 桑

原茂雄/征夷上途 中園健一/秋思抄 南下枝/雑詠 瀧本夕虹

民族の詩情 瀧本夕虹 8

歌壇秀吟抄(短歌研究十月号より) 9

揚子江の畔にて(一) 歌話会成立の由来 松浦久満太郎 10・11

武漢歌話会の歩み 寺中作雄 10・15

戦陣集 12・16

川路美英・岬庄二郎・田中孟・野中新緑・石渡徹郎・美田重八・

水佳津美・星野辰之助・窪川至郎・近石潔・宮本壽一・高橋安雄・

土岡昌平・若葉情志・西村平一・辻井敏彦

御知らせ 16

武漢歌人の使命 寺中作雄 17・18

作品 19・25

俘虜雑詠 寺中作雄/征旅 林和/靖国神社大祭 田代好鳥/陣

中雑唱 千葉両情/生活余情 穂本光子/旅情懷去 青葉俊樹/

冥財焼き 長澤健一/懷郷抄 山崎大五郎/雑詠 大陸住人/落

穂を拾って 北橋直/秋ふかく 町野龍子/雑詠 平井洋/豫南

従軍 林山郎/土佐橋上村 平松久

編集後記 松浦久満太郎 27

清規抄 27

### 第一巻第二号(第二号) 一九四二年二月一日印刷/同五日発行

※奥付上の発行日は一日、表紙・扉の記載は五日とあり。

〔表紙〕金宗燦

〔扉〕聖戦の詔勅を拝して(短歌研究一月号特輯より) 北原白秋・窪

田空穂・斎藤茂吉

大東亜戦争を讀ふ 1・2

瀧本肇・岡山秋男・木村満二・大陸住人・高橋蒼峰・穂本亨子・

吉村浮葉・田代好二・水野惠三良・靱曉美・寺中作雄・松浦久満

太郎

作品 3・8

聖戦讃頌 瀧本肇／雑詠 畝中かつ子／雑詠 吉村浮葉／渡支其

の他 關口一枝／マニラ陥落 藤原芳郎／みいくさ 高橋蒼峰／

はるかなる人に寄せて 平松たい子／回顧 鈴木浩陽／職域奉公

木ノ内二郎／新春を迎へて 高梨光章／大詔を拝して 穂本亨

子／雑詠 岡村隆雄／六つの花 南下枝／驕夷撃滅 寺中作雄

戦争と文学 松浦久満太郎 9・11

武漢歌話会の歩み 寺中作雄 12・18

哨煙集 12・18

辻井敏彦・川路美英・北橋史魚・野中新緑・田中孟・岡村洗鶴・

泉津根子・和田蘆生・原正・高橋安雄・重本忠治・村上政太郎・

近石清・佐野博・竹内龜三郎・岡時代・宮本壽一・相澤良一・新

美竹次・高橋兼一・佐藤次男・兒山熊吉・窪川至郎・黒崎勇・星

野辰之助・山下勇・井上豊・井戸耀介・吉川布水

漢口日本人の詩歌史 内田佐和吉 19・24

創刊号作品短見Ⅰ 寺中作雄 25・26

創刊号作品短見Ⅱ 松浦久満太郎 26・28

作品 29・35

戦時詠 岡山秋男／雑詠 林山郎／大東亜戦争 田代好二／しく

れ

水野惠三郎／雑詠 高木政明／大東亜戦争 大陸住人／近作一束

木澤木石／大東亜戦に寄せて 靱曉美／宣戦の大詔を拝して

木村満二／戦線炭焼 林和／冬野 松尾金蔵／十二月八日以後

松浦久満太郎

前線の声 吉村浮葉 36

編集後記 松浦久満太郎 37

原稿募集／次号執筆予告／清規抄 37

第一巻第三号(第三号) 一九四二年三月一日印刷／同五日発行

〔表紙〕 林正美

〔扉〕 太田水穂 ※無題

聖戦凱歌 1・2

瀧本肇・平松久・關口一枝・佐藤武次・田代好二・高梨光章・高

木政明・竹内千曲・水野惠三良・岡村隆雄・靱曉美・岡山秋男・

寺中作雄・松浦久満太郎

作品 3・10

天地晦冥 齋藤重保／戦時詠(二) 岡山秋男／近詠 平松久／

浅春抄 田代好二／父母ありて 林和／友の出産 靱曉美／雑詠

松木達雄／陣中雑唱 千葉雨情／シンガポール陥落 高木政明

- ／阿片 吉村浮葉／花楼街 南下枝／シンガポール陥落 關口一  
枝／雜詠 松尾金蔵／天のつかひ子 寺中作雄
- 短歌随想其の一 齋藤重保 11・12
- 大御旗はためく(転載歌) 五島美代子 12
- 創刊号秀歌鑑賞 千葉雨情 13・20
- 征塵集 14・22
- 野中新緑・辻井敏彦・泉津根子・川路美英・北橋史魚・高橋安雄・  
吉川布水・田中孟・黒崎勇・星野辰之助・美田童八・岡時代・加  
納陽治・林進・筆砂録一・千葉太郎・伊藤武平・宮本壽一・渋谷  
朋一・中島勇・新美竹次・檜垣流水・箕彌志磨・武田祥蔵・宮下  
真明・竹内千曲・川瀬民之助・松村信治・小高正・比嘉良廣・赤  
宗徳志・野田口正一・海野砂平・近石潔・重本重治・荒井直人・  
佐野博・佐川末人・亀井日和・齋藤進。川打勇・福田信正・金築  
茂
- 武漢歌話会の歩み 寺中作雄 19・22
- 大詔奉戴 齋藤重保 23・24
- 短歌徒然 林山郎 25・26
- 二月号作品管見Ⅰ 岡山秋男 27・28
- 二月号作品管見Ⅱ 瀧本肇 29・30
- 新嘉坡に日章旗翻る(転載歌) 岡麓 30
- 作品 31・37
- 星港竟陥落矣 瀧本肇／海兵弟が戦死に逢ひて 畝中かつ子／近  
作一束 長澤木石／征野素描 北橋直／長江航路 竹内千曲／英  
靈を弔ひて 藪内一賢／雜詠 佐藤武次／戦況を讀みて 水野恵  
三良／雜詠 岡村隆雄／新嘉坡島陥落記念講演会にて 伊藤正雄  
／病床にて 木村満二／雜詠 高梨光章／遺骨に拝す 林山郎／  
星港陥落に寄する歌 松浦久満太郎
- 前線の声 川上貞治・柴田勇・松村信治・村林実三・野村嶽雄 38
- 「前線の声」原稿募集／会員消息 38
- 編集後記 松浦久満太郎 39
- 原稿募集／次号執筆予告／歌話会例会通知／投稿上のお願ひ／清規抄 39
- 第一巻第四号(第四号) 一九四二年四月一日印刷／同五日発行
- 〔表紙〕 室田豊四郎
- 〔扉〕 扉の文 松浦久満太郎
- 若ざくら 越野雪比古 1
- 作品一 3・9
- 雪の四川 瀧本肇／病中抄(旧作) 關口一枝／近詠 平松久／  
早春 世古正文／雜詠 世古照枝／病中吟 畝中かつ子／長江を  
下る 田代好二／花 朝暁美／近作一束 長澤木石／繙読武漢歌  
人而作長歌并反歌 橋本嶽／死にゆく友 綾川禮子／反省 林和  
／近詠 岡山秋男／歌帖の中より 齋藤重保
- 民族的憧憬を詩歌に寄するツラン民族 姚暁客 10・12

- 軍神を拝す(転載歌) 齋藤瀏/軍神頌歌(転載歌) 阿部静枝 12  
 軍人八人集 13・19  
 若櫻 竹内千曲/九軍神を讃ふ 岡村洗鶴/桜 北橋直/陣中雜  
 唱 川路美英/石鱖の泡 野中新緑/戰場囁目 星野辰之助/ふ  
 るさとの母 泉津根子/討伐回顧 佐藤武次  
 武漢歌話会の歩み 寺中作雄 13・16  
 『武漢歌人』の創刊を祝して(「帚木」誌より転載) 伊藤次彦 16・17  
 なつかしき宵―歌話会消息に代へて 寺中作雄 18・19  
 会員消息 19  
 短歌随想其の二 齋藤重保 20・21  
 兵隊の作歌理念 北橋直 22・23  
 前号感銘歌 關口一枝・選/岡山秋男・選 23  
 箴梅集 寺中作雄・選 24・30  
 伊藤武平・鈴木浩陽・宮本壽一・武田祥蔵・藪内賢一・横野薫・  
 五十嵐幸柳・鈴木甫・吉川清・村林実三・林巖・渡邊忠雄・重本  
 忠治・高橋兼一・谷川道洋・中島勇・鹽田良平・佐川末人・土井  
 盛一・山崎明朗・檜垣能頼・鴨志田鯉助・三浦於紅・井上豊・杉  
 村信治・高宮珠裳・山本信一・利伊智・窪川至郎・花田吉雄・宮  
 下貞明・坂井富士夫・近石潔・石田大二郎・本間安治・中島浪之・  
 竹場重春・横井光照・鈴木吉重・石田益造  
 漢口に帰りにて 鯛島八代 31・33  
 三月号読後感 越野雪比古 33・37
- 三月号作品管見 林山郎 37・39  
 昭和の防人(転載歌) 土屋文明 38  
 作品二 39・45  
 鯛島氏に 松浦久満太郎/白粥 松尾金蔵/涉春賦 水野恵三良  
 /長江雜感 高木政明/茶房の一日 伊藤正雄/春に想へる 高  
 梨光章/秋陣抄 柳下穰/戦友中村君の死を報ぜられて 加藤晴  
 比古/爪哇降伏 鷹坡子樵兒/母上病み給ふ 木村満二/早春の  
 前線風景 松木達雄/報国篋麻 南下枝/春 林山郎/軍神頌賦  
 寺中作雄  
 前線の声 天野正一・福山裕・和田高治・古橋偉久郎 46  
 投稿上のお願ひ 46  
 編集後記 寺中作雄 47  
 原稿募集/次号執筆予告/歌話会例会通知/清規抄 47
- 第一巻第五号(第五号)一九四二年五月一日印刷/同五日発行  
 [表紙] 加藤晴比古  
 [扉] 扉の文 越野雪比古  
 作品一 1・7  
 越の劍嶺 越野雪比古/惜春賦 平松久/草のみち 畝中かつ子  
 /春宵譜 靱曉美/春は逝く 水野恵三良/旅にきて 松木達雄  
 /土に親しみつつ 高木政明/晩春 河津霞示羊/武漢大学行  
 南下枝/春怨 新坂美耶子/憤炎 木村満二/支那三題 林山郎



- ／青年賛歌 松浦久満太郎  
 短歌随想其の三 齋藤重保 8・9  
 このごろの気持 高木季熊 10  
 軍人十人集 11・17  
 特別攻撃隊を頌ふ 北橋直／春雷 佐藤武次／夕陽 重本忠治／  
 雨期抄 竹内千曲／みそさゞひ 星野辰之助／長沙作戦 野中新  
 緑／戦陣詠 川路美英／二春秋 村越文彦／こすもらま 加藤晴  
 比古／世紀の翼 高橋蒼峰  
 武漢歌話会の歩み 寺中作雄 11・15  
 歌話会に就ての御願ひ 編輯部 15・17  
 「風日」その他 瀧本肇 18・20  
 流れ 紅林桂之介 21・22  
 戎衣集 寺中作雄・選 23・29  
 千葉太郎・武田祥蔵・小山文子・田中孟・小柴六郎・泉津根子・  
 藪田賢一・堀内四郎・横野薫・山崎明朗・片桐進・高橋安雄・淀  
 川千秋・橋本茂男・鈴木甫・中島浪之・渡邊忠雄・松村信治・野  
 田友春・深澤哲・小山憲雄・黒崎勇・武田勇・佐々木保・吉川布  
 水・小高正・近石潔・遠藤五郎・中畑忠臣・越野千代樹・田島清・  
 鈴木吉重・村林実三・西澤勲・川島重信・鷺田峻水  
 故山 田代好鳥 29  
 四月号作品短見Ⅰ 松尾金蔵 30・31  
 四月号作品短見Ⅱ 平松久 31・36
- 征塵集の戦友諸氏に―武漢歌人三月号を読み 重本忠治 37・38  
 作品二 39・42  
 開花合掌 瀧本肇／前線にて 岡山秋男／春雑詠 世古正文／石  
 露の花 世古照枝／春日 關口一枝／折にふれて 高梨光章／燈  
 影 岩本孝子／近作一束 長澤木石／近詠 吉村浮葉  
 編集後記 松浦久満太郎 45  
 原稿募集／次号執筆予告／歌話会例会通知／清規抄 45  
 第一巻第六号(第六号) 一九四二年六月一日印刷／同五日発行  
 (表紙) ※無署名  
 (口絵写真) 寺中氏帰還送別歌会(於・東京屋)  
 (扉) 落下傘部隊(短歌誌ヨリ) 光永比佐夫・半田良平・加藤洵綾  
 作品一 1・8  
 続前線にて 岡山秋男／(無題) 松浦久満太郎／うきあぶら  
 松木達雄／近作一束 長澤木石／雑詠 朝暁美／初夏抄 田代好  
 二／旧詠 加和潤／五月 竹内千曲／指導員 慈海深／はるかな  
 る想ひ 高梨光章／雑詠 山田美江子／桃とあかしや 坂井敏彦  
 ／雑詠 高木政明／掃溜め 木村満二／初夏雑詠 水野恵三朗／  
 無題 林和／落下傘部隊 越野雪比古  
 短歌随想其の四 齋藤重保 9・11  
 移動行 田中孟(仏印派遣軍) 12  
 軍人十二人集 13・17

- 中島勇・國繁英男・慶徳寅次郎・名草燎朗・吉川布水・木根善一郎・田島清・鈴木甫・近石潔・小林英二・渡邊忠雄・津田政則  
 武漢歌話会の歩み 林和 13・16  
 御知らせ 16  
 前線の声 堀内四郎 17  
 戎衣集 瀧本肇・選 18・26
- 五十嵐幸柳・佐野政雄・武田祥蔵・淀川千秋・北橋史魚・佐野松男・佐川末人・野中新緑・坂井賢示・阿州山人・瀬川岩男・小川傳造・笹本孫太・川島重信・坂井富士夫。太田元美・鹽田良平・星野辰之助・橋本清吉・鈴木吉重・金澤貞繁・重本忠治・佳田秋三郎・安藤廣幸・中島勇・松村信治・鈴木甫・竹場重春・山田茂雄・佐藤武次・山崎明朗・遠藤五郎・伊藤武平・柳下穰  
 五月号評 林和 27・29  
 軍人十人集短見 關口一枝 29・30  
 戎衣集私見 朝暁美 31・33  
 社中消息 33  
 作品二 34・41
- 思慕故国 瀧本肇／苺 松尾金蔵／折々に 關口一枝／若葉 吉村浮葉／懐古鎌倉にて 古谷與市／生活抄 谷梢／故郷行 若本孝子／武漢大学を訪れて 横野薫／雜詠 岡村隆雄／初夏 松尾きみ代／前線の君を思ふ 島本富美子／青き火花(旧作) 村越文彦／手紙 藪内賢／写真の眼 南下枝／雜歌 世古正文／昼關
- 世古照枝／弟が遺骨かへる日 畝中かつ子／支那二題 林山郎  
 編集後記 松浦久満太郎 42  
 原稿募集／次号執筆予告／歌話会例会通知／清規抄 42
- 第一卷第七号(第七号) 一九四二年七月一日印刷／同五日発行  
 [表紙] 今井彌頼  
 [扉] 花見達二氏『日本的武の顕現』より、現地報告六月号  
 戎衣の座と歌の座・音信にかへて 坂井敏彦 1・3  
 作品一 4・11  
 生命 越野雪比古／日記抄 瀧本肇／愛兒逝く 瀧古正文／死にゆく吾子 世古照枝／離りし父へ 林和／雨の日のころ 畝中かつ子／無題 長澤木石／狂人 朝暁美／雨期 田代好鳥／内地の吾子想ふ 古谷與市／雜詠 谷梢／豫感 木村満二／大捷報 志岐義雄／近詠 高木政明／梅雨 水野惠三良／江西戦線 松木達雄／続続前線にて 岡山秋男
- 挽歌覚書 瀧古正文 12・14  
 移動行 田中孟(仏印派遣軍) 15  
 慶徳氏の作品に就て 宮野明 16・19  
 軍人九人集 20・23  
 川路美英・名草燎朗・野中新緑・淀川千秋・星野辰之助・千葉太郎・菅谷悦・佐藤武次・山田茂夫  
 武漢歌話会の歩み 林和 20・23

- 前号作品管見(一) 古谷與市 24・26  
 前号作品管見(二) 木村満二 26・28  
 戎衣集(その一) 瀧本肇・選 29・31  
 武田祥蔵・宮本壽一・大谷忠彌・中津賀青峯・林田篤・岩田秀雄・  
 久野さしの・泰山・増田志郎・住田秋三郎・清水正司・加藤次郎・  
 林生・中島勇・坂井富士夫・五十嵐幸柳  
 戎衣集(その二) 松浦久満太郎・選 31・34  
 渡邊忠雄・橋本清吉・山本國雄・品田米尚・立石巳好・高橋清・  
 竹場重春・中平忠治・鈴木吉重・住田秋三郎・安藤廣幸・西田秋  
 英・長谷川厚・遠五郎・堂下正道・山崎明朗  
 軍人十人集短見 田代好鳥 35・36  
 戎衣集評 竹内千曲 36・38  
 〈告知〉軍人短歌会／社中消息 38  
 作品二 39・45  
 鍊成行(一) 松浦久満太郎／廬山 松尾金蔵／下航 佐藤武次  
 ／空 高梨光章／雜詠 岩本孝子／雜詠 岡村隆雄／吾妹礼賛  
 荒井江草／並木路 横野薫／雜詠 松尾きみ代／近詠 加和潤／  
 近詠 神戸兵庫／捨石 慈海深／樂行進 重本忠治／戰陣吟 柳  
 下穰／湖北国原 村越文彦／落雀の状態 林山郎  
 編集後記 松浦久満太郎 46  
 原稿募集／次号執筆予告／歌話会例会通知／清規抄 46
- 第一巻第八号(第八号) 一九四二年八月一日印刷／同五日発行  
 〔表紙〕世古正文  
 〔扉〕扉の文 瀬古正文  
 作品一 1・8  
 夕波 越野雪比古／來襲 瀧本肇／無風帯 松浦久満太郎／雨雲  
 平松久／夏近し 志岐義雄／近作一束 長澤木石／憤怒 古谷  
 與市／盛夏 田代好鳥／江西戦線 松木達雄／雜詠 高木政明／  
 小詠 世古正文／歌友を送りて 朝暁美／遺品 畝中かつ子／雜  
 詠 關口一枝／夕月 世古照枝／友を得て 高梨光章  
 前線雜記 眞木信雄 9・11  
 軍人六人集 12・15  
 星野辰之助・川路美英・名草燎朗・野中新緑・吉川布水・村越文  
 彦  
 民族文学の歴史 藤田徳太郎 16・18 ※転載記事  
 武漢歌人の諸氏へ 岡山秋男 18  
 戎衣集 瀧本肇・選 19・28  
 伊澤秀文・佐野博・内田善・五十嵐幸柳・天野邦保・立石巳好・  
 中津賀青峯・宮本壽一・高橋安雄・路河和憲・波耶志廣志・上野  
 美廣・三ツ木文雄・太田鳳啓・武田祥蔵・竹場重春・渡邊忠雄・  
 北川蒼次・山崎明朗・赤宗徳志・遠藤五郎・重本忠治・岡時代・  
 堂下正直・鈴木眞一・手束恙一・柿木頭・神戸兵庫・長谷川厚・  
 西田秋英・下西正治

軍人短歌会御案内 28

漢口にて(一) 鯛島八代 29・31

七月号管見(一) 志岐義雄 32・33

社中消息 33

作品二 34・37

船旅 柳下穰／廬山 山田茂夫／歌信 横野薫／濁る揚子江 森

山了／溶漾集 江吉良／龍舌蘭 木村孝雄

編集後記 松浦久満太郎 38

原稿募集／次号執筆予告／歌話会例会通知／清規抄 38

第二卷第九号(第九号) 一九四二年九月一日印刷／同五日発行

〔表紙〕題字・松浦久満太郎／絵・世古正文

〔扉〕扉の文 瀧本肇

作品一 1・11

土浦霞ヶ浦行幸を遙かに拝す 志岐義雄／海征かば 平松久／雑

詠 古谷與市／生母追憶 眞木信雄／近作一束 長澤木石／簡閑

点呼 世古正文／秋立ちそむ 水野恵三良／病中詠 吉村浮葉／

妹上京 畝中かつ子／折にふれて 關口一枝／文月十二日の夜に

高梨光章／友自殺の報を聞きて 靱曉美／近作 高木政明／江

邊懷郷 木村満二／立秋以後 松浦久満太郎／吾兄母 瀧本肇

對影居随筆 瀧本肇 12・14

感想として 障子信 15・17

戎衣秀作集 18・21

川路美英・野中新緑・星野辰之助・窪川至郎・中津賀青峯・手束

恙一・伊藤武平・

揚子江の畔にて 松浦久満太郎 22・24

一束の藁 渡邊忠雄 25・27

戎衣集 編輯部・選 28・35

遠山二三男・吉川布水・宮本壽一・上野美廣・中畑忠臣・立石巳

好・小山憲雄・鈴木吉重・中平忠治・西田秋英・重本忠治・堂下

正直・山崎明朗・下西正治・柿木顕・五十嵐幸柳・武田祥蔵・岩

川仁・坂井富士夫・宮下貞明・相良次蔵・田野三郎・野田友春・

金澤真繁・日下部士郎・太田鳳啓・安藤廣幸・竹市正

〔告知〕軍人短歌会 35

漢口にて(二) 鯛島八代 36・38

〔告知〕急告・原稿宛先変更御通知 編輯部 38

前号作品管見 39・41

前号作品一佳作抄 瀧本肇／女流作品について 世古照枝

〔告知〕前号誤字訂正 41

作品二 42・47

あけくれに 山田茂夫／警備雑詠 村越文彦／みずほのくに 高

橋蒼峯／雑詠 神戸兵庫／母を恋ふ 横野薫／筆のつかれ 慈海

深／近日詠 竹内千曲／雑詠 二荒晃／雑詠 佐藤武次／寶林寺

坂井敏彦

編集後記 松浦久満太郎 48  
原稿募集／次号執筆予告／歌話会例会通知／清規抄 48

第二巻第一号(第一〇号) 一九四三年一月一日印刷／同五日発行

※奥付は第一巻第十一号と表示。

〔表紙〕 ※無署名

〔扉〕 佐久良東雄の歌

作品一 1・6

吾れは行く 林和／再び十二月八日を迎へて・齋藤瀏著獄中の記  
を読みて 古谷與市／大詔奉戴一週年・惜別原田力氏・年末雑詠

木村満二／雑詠 畝中かつ子／晩秋 朝暁美／大東亜戦一週記  
念日 關口一枝／近詠 高梨光章／澄む秋 世古照枝／晩秋 高

木政明／雑詠 平松久

對影居雜記 瀧本肇 7・8

獄中の記を読みて 古谷與市 9・11

見失はれた神 世古正文 12・14

海ゆかば 伊藤清六 15

戎衣秀作集 16・19

坂井富士夫・野中新緑・星野辰之助・宮島加津雄・淀川千秋・郡  
司春之助・

武漢歌話会歌会略報 朝暁美 16・19

戎衣集 瀧本肇・選 20・30

山本信一・立石巳好・久野きしの・富田清・高橋一夫・田中きん・

武田祥蔵・東芝直治・山田秀夫・鹽田良平・手束恙一・中畑忠臣・

萬宮珠裳・大石定・田中理伊智・須藤武・鹽田燎朗・上西一男・

田村和夫・西山正博・浮邊治夫・大門惣次郎・岩川仁・飛高光男・

濱田吉弘・安井宗一・下西止治・初川まつじ・坂本輝治・美也地

正人・川瀬民之助・大路實・成岡正久・草庵・満喜・近石キヨシ・

黒崎勇・住田秋三郎・五十嵐幸柳・太田鳳啓・西澤微光・杉福太

郎

前号同人作品管見 古谷與市 31・32

十月号読感 横野薫 32・33

〔告知〕 寄付金／軍人短歌会御案内 33

私の好みから 海部賤男 34・38

十一月号より(私の好きな歌) 畝中かつ子 38

第二回短歌会詠草 華中水電文化部 39・40

杉浦義末・大友栄治・鈴木隆之・中原正・干原勝・高森藤雄・阿

部武・牧直・板垣憲治・内田総一郎・江本巳一・渡邊義則・谷貞

次・虎谷長四郎・副島郁子・菅沼祐蔵

作品二 41・43

休日の後 二荒晃／秋冷え 葛原芳郎／山の生活 慈海深／続

婦国歌抄 山田茂夫

編集後記 ※無署名 44

原稿募集／清規抄 44

## 第二巻第二号(第一二号) 一九四三年二月一日印刷/同五日発行

## 原稿募集/清規抄 24

〔表紙〕 ※無署名

〔扉〕 百人一首

同人作品 1・4

戦捷歳旦 瀧本肇/九首 世古正文/折にふれて 藪内賢一/近

詠 葛原芳郎/冬の夜 林和

鉄幹と晶子 新派和歌運動の展開 興垂寮・小林茂三 5・9

〔告知〕 再び投稿についておねがひ 編輯部 9

萬葉集鑑賞(一) 瀧本肇 10・11

戎衣秀作集 川路美英・淀川千秋・村越文彦 12・14

戎衣集 編輯部・編 15・16

住田秋三郎・手束恙一・横野薫・山田清吉・中畑忠臣・安藤廣幸・

田島清・青山芳男・高橋兼一・林茂

一月号同人作品短評 瀧本肇 17・18

戎衣集批評 世古正文 18・20

〔告知〕 前号訂正 19

前号十首抄 世古照枝 20

水電歌会詠草 華中水電文化部 21・23

千原勝・谷貞次・菅沼祐蔵・今村文治・高森藤雄・杉浦義末・牧

直・虎谷長四郎・板垣憲治・江本克己・鈴木隆之・千原ぬい子・

大友栄治・内田総一郎・副島郁子・中原正・阿部武・田村慎

編集後記 瀧本肇 24

## 第二巻第三号(第一二号) 一九四三年三月一日印刷/同五日発行

〔表紙〕 ※無署名

〔扉〕 愛国百人一首(二)

作品一 1・4

京滬抄 瀧本肇/雑詠 高梨光章/しづかなる日に 畝中かつ子

/新しきいのち 世古照枝/友の死 關口一枝/陸軍記念日 木

村満二/亡き史子へ 林和/春来る頃 世古正文

正岡子規の歌 柴山美都緒 5・6

萬葉集鑑賞(二) 瀧本肇 7・9

戎衣秀作集 10・18

川路美英・坂井富士男・山田秀夫・村越文彦・遠山二三男・星野

辰之助・野中新緑・淀川千秋・久野きしの・五十嵐幸柳

戎衣集 瀧本肇・選 19・29

宮島加津雄・高橋安雄・住田秋三郎・川瀬民之助・近石キヨシ・

武田祥蔵・島田信喜・糸樫馬・勝部久・杉光邦・中豊次・黒崎勇・

矢野初芳・江原二寶・野田友春・夏茂充・岩田秀雄・大門惣次郎・

沼田俊雄・土屋盛治・須藤武・本田明義・榊原武・横野薫・市川

まつじ・野口利雄・稲川室猛・安井宗一・高橋一夫・黒澤太一・

上原尚忠・水田幸一・中津賀青峯・手束恙一・清水正司

戦塵の中より 鯛島八代 30・33

- 私の好きな歌 關口一枝 34
- 水電歌会詠草 華中水電文化部 35・36
- 高森藤雄・内田総一郎・板垣憲治・中原正・牧直・杉浦義末・干原ぬい・田村慎・小川正夫・前田原市・虎谷長四郎・鈴木隆之・今村好江・大友栄治・副島郁子・谷貞次・干原勝
- 作品二 37
- 英靈にさぐぐ 藪内賢一／雑詠 寺澤熙／弟の死 二荒晃
- 転載歌(武漢文化四月号) 38
- 日本精神 瀧本肇／はるさめ抄 朝暁美／日の御国 世古正文
- 編集後記 世古正文 39・40
- 原稿募集／清規抄 40
- 第二卷第四号(第一三三号) 一九四三年四月一日印刷／同五日発行
- 〔表紙〕 M. IWATA
- 〔扉〕 愛国百人一首(三)
- 同人作品 1・4
- 時局偶感 瀧本肇／長江の春 武田祥蔵／(無題) 藪内賢一／
- おりおりの歌 山田茂夫／微恙 世古正文／木材伐採 林和
- 萬葉集と源実朝 興亜寮・小林茂三 5・8
- 萬葉集鑑賞(三) 瀧本肇 9・11
- 中国文学と日本近代文学 李抱青 12・16
- 戎衣秀作集 16・19
- 川路美英・遠山二三男・村越文彦・中津賀青峯・久野さしの
- 戎衣集 瀧本肇・選 20・26
- 黒崎勇・平石利郎・高橋兼一・宮島加津雄・島田信喜・糸櫻馬・久保忠次・中津賀青峯・高橋一夫・石川徹・鈴木行雄・宮田清・矢野清己・今井誠・利伊智・田島清・宮坂又男・飯島美佐子・須原俊輔・林太郎・中野武司・岩田秀雄・福田光代・松岡忠・博田峯月・畑中豊次・森力男・岡田信次郎・山本國雄・松浦委渚生・住田秋三郎・横井光照・加藤晴彦・藤岡秀辰・天野正一
- 前月号同人作品短評 林和 27・28
- 随想・心の鏡 竹岡光哉 27・28
- 少年 竹岡光哉 29・32
- 萬葉集における抒情の方法 編輯部 29・32
- 水電歌会詠草 華中水電文化部 33
- 大友栄治・高森藤雄・杉浦義末・今村好江・内田総一郎・副島郁子・鈴木隆之・中原正・谷貞次・菅沼祐蔵・板垣憲治・牧直
- 編集後記 世古正文 34
- 原稿募集／清規抄 34
- 第二卷第五号(第一四号) ※未発行
- 第二卷第六・七号(第一五号) 一九四三年七月一日印刷／同五日発行
- 〔表紙〕 ※無署名

〔扉〕玉かつまより

同人作品一 1・8

嗚呼山崎守備隊 眞木信雄／賜暇帰国 福田一男／江漢路 長澤

木石／慰霊祭の日に 塚本清／敢闘 武田祥蔵／雑詠 水田吞龍

／山本元帥の国葬の日に 木村満二／郷軍演習にて 谷貞次／妻

病む 高森藤雄／防空演習 牧すなを／近詠 中原正／弟 前田

源市／雑詠 畝中かつ子

戎衣集 9・12

遠山二三男・北あつむ・吉井栄蔵・橋爪隆・畑中直次・宮坂又男・

岩田秀雄・奥平儀一郎・西村昭・今井誠・飯島美佐子・安藤廣幸・

高橋兼一・青島金一・高橋顕・天野正一・杉常盤・飯塚武・藤岡

秀辰・井戸栄・高木喬・黒崎勇・辰巳幸男・手束恙一・加藤照夫・

田中恵子・藤田安一・諸橋悦久・久野きしの・宮坂又男・小座野

次夫・中本千枝子・逸名氏

歌会記 朝暁美 13・16

○陸軍病院慰問歌会 朝暁美 17・18

戎衣秀作集 19・21

村越文彦・淀川千秋・西澤勲・千葉雨情・伊藤秀文・遠山二三男・

山田秀夫・葛原芳郎・中津賀青峯・福山裕・船木誠一・矢野晴巳・

川路美英

漢口の夏に寄せて 潮明満 22・23

同人作品二 24・28

噫山本元帥 志岐義雄／大陸夏吟抄 三嶋太七／雑詠（山本元帥

の戦死を謹みて） 潮明満／雑詠 朝暁美／噫アツツ島 關口一

枝／父の死 野口實／折にふれて 岡本節子／従軍 佐藤遐子／

雑詠 杉江鱸／無題 山田ミエ／靖国神社臨時大祭 藪田賢一／

雑詠 林和／戦闘 濱尾多事見

藤沢古實先生歓迎座談会記 志岐義雄 29・30

水電歌会詠草 華中水電文化部 30・31

副島郁子・鈴木隆之・大友栄二・千原勝・江本克一・井上富士子・

板垣憲治・一村かほる・虎谷長四郎・前田源市・松本一司・高森

藤雄・杉浦義末・青木巖・木下大萬・菅沼祐蔵・谷貞次・牧直

軍人作品（前号批評） 眞木信雄 32・34

前号同人作品批評 木村満二 35・38

武漢歌話会二週年に際し 朝暁美 38・40

編集後記 谷貞次 41

同人動静 41

第二巻第八・九号（第一六号）一九四三年九月一日印刷／同五日発行

〔表紙〕 ※無署名

〔扉〕楫取魚彦・久坂玄瑞・平野國臣

同人作品一 1・6

夏日・凡感 三嶋太七／人の忌に 長澤木石／家信 山田清吉／

雑詠 二荒晃／増水期 眞木信雄



武漢歌話会記 朝暁美 1・6・19・21

歌論 林和 7・9

戎衣秀作集 編輯部・選 10・12

相良治蔵・宮島加津雄・寺坂基義・遠山二三男・淀川千秋・安田

喜代鐘・高木喬・美濃一風・渡邊志岐郎・中本千枝子・黒崎勇・

鈴木行雄・橋本利一・中津賀青峯・戸田千草・利伊智・青島金一・

勝部久・小川信雄・遠藤忠夫・宮坂又男・山田正之・今井助夫・

土井盛一・井戸栄・後藤武治郎・宇都宮夏治・今井誠・奥平儀一

郎・川島秀雄・田中恵子・木下保・亀山清

特別寄稿・我が歌境 帆里映 13・16

添作実例 長澤木石 17・18

同人作品二 19・24

雑詠 林和／厳しき世 牧直／雑詠 木村満二／噫山本元帥 山

田美枝／雑詠 長江ますほ／木蔭 畝中かつ子／友 關口一枝／

雑詠 朝暁美／吾子 辰巳幸男／自省 谷貞次

辻小説・休暇／魚の水を得た如く 賣油郎 22・24

隨筆・よろこび 黄楊葵 25・27

和歌と中国人 辰巳幸男 28・29

前号戎衣秀作集批評 關口一枝 30・31

水電歌会詠草 華中水電文化部 32

牧直・谷貞次・虎谷長四郎・板垣憲治・内田総一郎・鈴木隆之・

中原正・前田源市・副島郁子・井上ふじ子

編集後記 谷貞次・眞木信雄 33・34

各位に御願ひ 33

### 三 『武漢文学会雑誌 武漢文化』

三・一 書誌事項および解題

〔刊行状況〕『武漢文学会雑誌』一九四二年二月？～一九四二年四月

一二日（第一号）第二号）↓『武漢文学会雑誌 武漢文化』

一九四二年一〇月八日～一九四三年四月八日（第一卷第三号）第二

卷第四号）／全九冊／隔月刊

〔編輯人〕濱野三八

〔発行人〕新谷毅一（第一号）↓濱野三八（第二号）第二卷第四号）

〔印刷所〕飯田三寶堂（漢口中山路一三三号）↓華中印書館（漢口特三区鄱

陽街六五号）※第二卷四号より変更

〔発行所〕武漢文学会（漢口特三区両儀街五号中日文化協会武漢分会内）

〔体裁〕B5版／六〇～一〇五頁〔定価〕五〇銭～七〇銭

〔所蔵状況〕稿者蔵・第二卷～第二卷第一号、第二卷第三号～第四号

※他機関所蔵なし



【図3】『武漢文学会雑誌』（第2号 1942・4）表紙。

本誌は武漢居留民によって結成された文学団体・武漢文学会の機関誌である。創刊は一九四二年二月頃と推定されるが、現時点で本誌の創刊号は発見されておらず、また同時代資料が不足していることもあり、会の成立および雑誌発刊の背景については不明である。ただし、武漢歌話会を結成した松浦久満太郎が、歌話会以前に大江文藝会という現地文学者団体があったことを証言しており、本会はその大江文藝会が雑誌刊行を機に発展的に再結成したものだとも推察される。<sup>8)</sup>

本誌の誌名は通巻第二号までは『武漢文学会雑誌』だが、同会が中

日文化協会武漢分会の傘下に入ったことを契機に、第三号より『武漢文学会雑誌 武漢文化』（以下『武漢文化』と略）と改題、表紙の題字も武漢分会の理事長・張仁蠡（漢口特別市長）の揮毫へと変更された。【図3・4】



【図4】『武漢文学会雑誌 武漢文化』第1巻第3号 1942・9）表紙。題字は武漢分会理事長・張仁蠡（漢口特別市長）による。

この武漢分会への編入は、先に紹介した『武漢歌人』とも同じである。だが本誌は「文協武漢分会の総合雑誌」<sup>9)</sup>の役割が担われ、その文化事業の実践を報告する役目が期待されていたようである。しかし本誌の構成を見るかぎり、その意図は実現されていたとは言い難い。各号の構成はおおよそ巻頭に評論、巻末に小説が配され、随筆・短歌・

小説といった文芸作品の他、図書紹介、書評欄、アンケート、座談会などが組まれている。中日文化協会傘下となった第三号以後には「工作月報」などの分会の彙報が加えられるが、それは紙幅のわずかしかがめず、全体として総合文芸雑誌の体裁を保っているといえよう。

また本誌は出発が文学団体の同人誌だったためであろう、一般的に論説に比べ小説・韻文の分量が多い。なかでも特に小説には力が入れられていたようで、毎号の作品掲載はもちろん小説募集の告知も頻繁になされている。そしてその書き手は君野毅一や井戸耀介といった居留民文学者が並んでおり、この雑誌はまさに武漢居留民による武漢居留民のための文学雑誌であったといえる。そしてそれは掲載作品の傾向からもうかがえる。君野の「十三點」（第二号）は、武漢で退廃的な生活を送る日本人男性と中国人娼婦とのすれ違いを描いたラブロマンスであり、「舗道」（第三号）はかつて漢口租界に暮らしていた欧米人を懐かしむ内容を持つなど、いずれも漢口を舞台にした甘い抒情性をもつ作風である。一方、井戸の「ある野病記」（第五号）は野戦病院での入院生活が描かれ、「面影」（第九号）では戦地での文化工作の様子とその過程で生じた中国人児童との交流が描かれるなど、戦地の現実を描く傾向を持っている。租界の退廃性を描く君野と、前線の緊張感を描く井戸、その作品が併存する本誌の小説の傾向には、兵士と居留民が交差する武漢という都市の特徴を読み解くことができるともいえるよう。

また本誌の興味深い点としては、武漢で実施された文芸イベントの

記録がみられることである。例えば第五号には武漢分会主催で「大東亜戦争一周年記念」の文学懸賞が実施された旨と、その入選作品名（秦昌平「先鋒」、君野毅一「菜油燈」、八田保「一年経つ」、井戸耀介「面影」、金政盾「長江の産業員」）の名が挙げられている。また各入選作品も第六号（秦・君野・八田、第九号（井戸））に掲載されており、現地における文芸文化政策とその内実を検討する貴重な事例を提示している。

ちなみに本誌刊行の前後には、上海で『長江文学』（一九四一・六一―一九四二・五）長江文学会、『上海文学』（一九四三・四―一九四五・五）文学研究会）が刊行されている。ここには戦後日本で活躍する小泉謙や池田克己、武田泰淳など文学史的に注目すべき執筆者・作品が集っている。それに比して本誌の執筆者はあくまで現地居留民であり、作品も質的には両誌に見劣りするといわざるを得ない。しかし季刊であった『長江文学』『上海文学』に対し、本誌は隔月ごとに刊行され、判型や紙質、表紙・カットなどのデザイン面でも引けを取るものではない。上海に比べ人口も文化的環境も圧倒的に小さかった武漢において、上海の文学雑誌に拮抗しうる体裁をもった本誌の存在は、武漢の文芸文化および出版状況のさらなる調査・検討の必要性を示している。

なお『武漢文化』の終刊は未詳である。ただ『大陸新報』掲載記事によれば、武漢分会の宣導委員であり創刊から本誌の編輯人を務めた濱野讚（濱野三八）が一九四三年五月で帰国する旨が記されている。<sup>10</sup>

また同年三月実施の設立二周年記念を境に、武漢分会の出版物が減少傾向にあることを勘案しても、第二巻第四号が終刊号と推定されよう。

三・二 細目

\* 作品ごとに「作品名 執筆者名 ページ数」の順で示した。

\* 詩歌や書評などの短文はコーナーごとにとまとめた。また各作品は「作品名 筆者名」の順で併記し、斜線で区切って示した。

\* 目次や角書などで文章の種類が示されたものは、(丸括弧)で記載した。

\* 注記については、随時「※」で示した。

第一号 ※未発見。一九四二年二月頃刊行か。

第二号 一九四二年四月一〇日印刷／同一二日発行

〔表紙・扉絵〕三谷利重

〔目次・カット〕室田・松尾・紅林

新ヤング・チャイナ論―新中国建設に協力する一日本青年の手記

七類達 1・44

近世封建社会考―徳川時代の精神機構 佐々木顕昭 45・55

花と小鳥と小魚と(随筆) 片岡澄江 56

寒林抄(詩) 今井正 57

某日(誌) 天谷信 58

タヒチ島文学(随筆) 小木阿津志 59・63

映画「或る日の干潟」について(随筆) 妹尾禎郎 64・65

苦力と減水期(詩) 野村杜季子 66

無題(詩) 田中信一 67

炉辺断層(随筆) 秋田一郎 68・69

ある日の会話(随筆) 楊下枕水 70・75

漢口の雨(随筆) 紅林桂之介 76・77

偽愚禿のたわごと(随筆) 清崎京佐 78・79

ボタンパン哀話(読物) 濱野讚 80・84

〔子供の頁〕武漢に在る父の許へ故郷の子供より送られたる／正月と

台所のはいく 五十嵐勇次 85・86

十三點(小説) 君野毅一 87・97

図書紹介―社会・経済・文芸 98・104

グスタフ・アマン著『支那農民闘争』現代支那史の一頁 緑川／

島恭彦著『東洋社会と西欧思想』・西洋思想史に於ける東洋社会

論とその西欧的偏見の是正 山田／ラムソン著・前島豊訳「支那

社会病理学」 外山／「アメリカ戦時社会経済の基礎構造」・戦

時下のアメリカ労働力問題 奏野／森口多里著「近代美術」ア

ツシ／徳永直著「作家と生活」 外山／劉鉄雲著・岡崎俊夫訳「老

残遊記」 外山／齋藤瀏著『獄中の記』 アツシ

編輯後記 編輯部 105

第一巻第三号(第三号) 一九四二年九月二五日印刷／一〇月八日発行

〔表紙〕題字・張仁蠡／絵・林毅

随筆 1・18

はなはちす 南皮町人／端午と湘鄂 佐々木顕昭／賞金 小木阿

- 津志／齊東野人語 本多聰／小鳥ども 紅林桂之介  
 日本映画の動向・大東亜映画の考察及紹介（評論）  
 尾花加津美 19・24  
 春來たりなば（ラヂオドラマ） 妹尾貞男 25・38  
 詩 29・41  
 中山公園の池に就いて 山田箕好／残骸 中野沼／かわおと 同  
 人／姑娘に就いて 高村信雄  
 金宗燦（短編） 田淵正二 42・44  
 馬雪梅（小説） 謝希平作・大木直枝訳 45・48  
 図書評論 49・57  
 西谷啓治著「世界観と国家観」 秋田二郎／セオドーア・ハンバー  
 ク著・青木富太郎訳『洪秀全の幻想』——太平天国乱の起源に關す  
 る研究資料 清嗣／今村忠男著『軍票論』——軍票の性格意義究明  
 清嗣／狐物語について——中世期の市民文学としての 福田  
 詩 49・54  
 近景 妹尾貞男／朝 同人／聖戦 濱野讚／ある一つの修正 岡  
 本等／小隊夏の雨を渡る 山田箕好  
 舗道（小説） 君野毅一 58・65  
 編輯後記 編輯部 66
- 第一卷第四号（第四号）一九四二年一月二五印刷／二月八日発行  
 （表紙）※無署名
- 興亜教育建設への構想 鍵山喜想 1・6  
 民族發展と文化接觸に就いての一考察  
 ——古代日本宗教發展を一例として 佐々木顕昭 7・17  
 漢陽秋意（短歌） 瀧本肇 18  
 模索と日々（断片） 影奈信 19・21  
 江西の句（俳句と文） 角杉一郎 22・24  
 厚生音楽論 木村文夫 25・29  
 最近のノートから 牧野敏之 30・36  
 喜劇「ウインザーの陽気な女房」に就いて 帶瀬長雄 37・39  
 近ごろの歌（詩） 倉科信一 40・41  
 おんな（小説） 大木直枝 42・44  
 手紙（小説） 田中英蓉子 45・49  
 翻訳 嘸囉（匪賊の乾分） 沈從文作・濱野讚訳 50・58  
 編輯後記 編輯部 59
- 第一卷第五号（第五号）一九四二年二月二五印刷／二月八日発行  
 （表紙）※無署名  
 大東亜戦と文化力（卷頭言） ※無署名 1・2  
 三民主義の全体主義的性格を把握せよ  
 張楡芳（大楚報社社長） 3・8  
 中日文化の歴史的関聯 中村考也 9・14  
 八紘一字（短歌） 世古正文 15・16

十二月八日（ハガキ回答） 17・20

野村杜季子・山田箕好・李鼎安・大串國夫・紅林桂之介・石星川・

本多房子・牧野敏・林毅・堀口行松・瀧本肇・松尾豊徳・碧山楼

主人・鈴木ワタル・謝希平・孫敢敏・佐々木顕昭

募集小説当選発表 中日文化協会武漢分会 20

〔文化短評〕 秋燈戯書 佐々武人／忠の映画 瀧本肇 21・23

民族発展と文化接触に就いての一考察（承前）

—古代日本宗教発展を一例として 佐々木顕昭 24・43

寄稿募集 武漢文学会 43

現地に於ける日本語（座談会） 44・53

〔出席者〕 范三維・本多房子・瀧本肇・倉科信一・福田敏之・古

屋静江（編集部）濱野讀・影奈信・松山忠

汪主席を迎ふ—昭和十七年十一月十四日来滬（詩） 倉科信一 55・56

ある野病記（創作） 井戸耀介 57・67

〔同人語〕 福田君を送る 影奈信 68・69

工作月報 68・69

編輯後記 編輯部 70

## 第二巻第一号（第六号）

一九四二年二月二五日印刷／一九四三年一月八日発行

〔表紙〕 ※無署名

特輯 昭和十八年現地文化界の課題

武漢の學術文化界の見通しと指導 吉岡正秀 1・4

文化と翼賛運動 堀口行松 4・5

戦争現実としての文化 瀧本肇 5・7

聖戦化に於ける我等の使命 木村文夫 7・9

来年 大木直枝 9・10

筆を銃に 夏島寛 10

昭昭神武（短歌） 瀧本肇 11・12

〔文化短評〕 感想 根本一郎 13・14

戦争と煙草（読物） 紅林桂之介 15・19

寄稿募集 武漢文学会 19

武漢文藝協会の過去と将来 劉濠然 20・27

〔図書評論〕 平瀬巳之吉著「近代支那經濟史」—清代經濟社会の客観

的基礎分析と主体的条件の解明 山田清 28・31

工作月報 31

大東亜戦一周年紀念募集当選小説

菜油燈（二等当選） 君野毅一 32・47

先鋒（二等当選） 秦昌平 48・62

一年経つ（三等当選） 八田保 63・69

編輯後記 編輯部 70

## 第二巻第二号（第七号） ※未発見

## 第二卷第三号（第八号） 中日文化協会武漢分会成立二週年紀念特卷

一九四三年二月二十五日印刷／三月八日発行

〔表紙〕※無署名

武漢分会成立二週年感言 姚一新 1・2

翻訳原稿募集 武漢文学会編輯部 2

新中国教育者への期待 鍵山喜想 3・4

文化合作への現段階と将来 深澤一雄 5・6

文化運動に與ふ 岩崎賢太郎 7

中日文化協会武漢分会二週年を迎ふるの感想 吉岡正秀 8・10

自然科学研究室の提唱 内田佐和吉 11・16

新中国に於ける信仰の対象―文協武漢分会成立二週年に寄す

瀧本肇 17・22

児童文化と映画 鴉土満 23・25

寄稿募集 武漢文学会 25

建築美学序説 池田官治 26・28

浅春随感 秦昌平 29・32

野菜かご 深澤柳子 32・33

私と「話劇」 謝希平作・傳承堯訳 34・36

蛇山（創作） 三田信吉 37・44

工作月報 45

編輯後記 47

## 第二卷第四号（第九号） 一九四三年三月二十五日印刷／四月八日発行

〔表紙〕※無署名

武漢歌壇の新たな征途―和歌の本質を語る 瀧本肇 1・2

短歌 3・5

日の御國 世古正文／はるさめ抄 朝暁美／日本精神 瀧本肇

詩とその周囲 竹岡光哉 6・11

詩 12・18

撃ちてしまむ 竹岡光哉／永劫の焰のなかに 竹岡光哉／或る

占領地 宇津木賢／二月の歌 妹尾貞男／風景 妹尾貞男

マニラ通信 白澤治 19・21

〔現地文化〕日本趣味談義 池田官治 22・24

俳句 26

地に芽ぐむもの 野村杜季子／塔 湊甌平／燈節 向野楠葉／無

題 素文字

面影（創作） 井戸耀介 27・41

民船（創作） 武丘善治 42・59

※この号「編輯後記」なし

## 注

（1）日中戦争以降の漢口の邦人人口の動向は、『外務省警察史 第四十九卷 支那之部（中支 在漢口総領事館』（不二出版 二〇〇一・九）を参照

- した。
- (2) 同書に収録された漢口租界関連の論文は以下の通り。孫安石「漢口の都市発展と日本租界」、李江「漢口租界の都市と建築」、富井正義「漢口日本租界の都市空間史」
- (3) 『武漢大陸新報』は大陸新報社が『漢口日日新聞』を買収し、一九三九年五月二七日に創刊した。現存するものは国会図書館蔵の一九四四年八月三日～三十一日(うち欠巻多数)分のみである。
- (4) 両誌の存在とその意義については、昭和文学会二〇一八年春季大会国際シンポジウム「東アジアの日本語文学研究の可能性と課題」(二〇一八年七月一六日 於・東京女子大学)において、「汪兆銘政権勢力下の日本語文学―上海・南京・武漢を中心に」と題してすでに報告している。その後新たに『武漢文化』第二巻第一号・三号を発見し、まとまった数が確認できたため細目を報告することとした。
- (5) 拙稿「武漢居留民社会の日本語文学―武漢文学会・武漢歌話会の動向から」(龍谷大学『国文学論叢』二〇二一・三)
- (6) 松浦久満太郎「揚子江の畔にて」(一) 歌話会成立の由来」(『武漢歌人』一九四一・二)
- (7) 無署名「編輯後記」(一九四三・一)に「新春劈頭、本誌の編輯発行人の更迭があり、同人中心に瀧本肇氏が選ばれてその任に就くことになった」とある。
- (8) 6に同じ。
- (9) 編輯部「編輯後記」(『武漢文化』一九四二・一〇)
- (10) 「伸びゆく武漢 目覚ましい中日文化の交流 濱野さんのご自慢」(『大陸新報』一九四三・五・七 朝刊二面)

※本研究は科研費(19K00311)の助成を受けたものである。



**Abstract**

A bibliographical introduction and commentary of *Wuhan Poets* and *Wuhan Culture: A Journal of the Wuhan Literature Society*

Takafumi KIDA

Studies on the Japanese Concession in Hankou (part of present-day Wuhan) have been done to a certain extent in the fields of political history and architecture and urban studies. On the other hand, little progress has been made in studies on the daily activities of the local concession residents, especially the cultural aspects, and there is a lack of historical documents.

However, the author has recently obtained two literary magazines published in Hankou, one entitled *Wuhan Poets* and the other entitled *Wuhan Culture: A Journal of Wuhan Literature Society*. These journals were published by the Wuhan *Tanka* Poetry Club and Wuhan Literature Society, which are literature associations established by the residents of Hankou. Later, they both changed their nature to become the journals of the Wuhan Chapter of the China-Japan Culture Association, a cultural organization established by the Wang Jingwei administration to promote their cause. Therefore, these journals give us a glimpse of literary/ cultural activities of the concessionary society in Hankou, as well as the realities of the culture control in the region under the Wang Jingwei administration.

This paper aims to present fundamental historical documents that reveal facts about cultural activities and the control system in the lives of the residents of the Hankou Concession by offering a bibliographical introduction and commentary of the above-mentioned literary magazines.

**Keywords:** Hankou Concession, Wuhan Literature Society, Wuhan Tanka Poetry Club, Wuhan Chapter of the China-Japan Culture Association, Culture control

